

「私と防犯との関わり」

株式会社プロテック 代表取締役
総合防犯設備士 第 01-0018

永井 健三



「防犯設備」40周年特別号のリレートークへの投稿機会を頂きました。「私と防犯との関わり」を振り返りました。拙文をご笑読戴ければ幸甚です。

「安全・安心」提供産業との関わり

昭和40年代後半（昭和45～49年、1970～1974年）は、消防法や建築基準法の改正の背景となる火災惨事が相次いで発生しました。不特定多数が集うデパート、ホテル、病院等々での大惨事、消防設備業界でよく言われる「昭和40年代の三大火災」です。

発 生：1972年5月13日
場 所：大阪市中央区 千日デパートビル
死 者：118人
負傷者：約80人
日本のデパート火災として
最大の被害

発 生：1973年11月29日
場 所：熊本市中央区 大洋デパート
死 者：104人
負傷者：67人
大阪市中央区の千日デパート火災の
翌年に発生した大惨事

発 生：1976年10月29日
場 所：山形県酒田市 酒田大火
（都市火災）
被 害：死者1名、負傷者1,003人、
1,774棟焼損、
消失面積22.5ヘクタール、
損害額405億円

この期間に数多くの惨事が発生し、防火管理上の問題や避難誘導の不備等々防火管理運用上（運用ソフト面）の問題が指摘されました。

このような惨事を踏まえて、消防法の大改正とも言うべき消防法第17条の3の3による「消防用設備等点検報告制度」が創設されたのが1974年（昭和49年）。施行されたのが1975年（昭和50年）4月1日。

その新聞記事を視て『消防設備業に勝機在り』と、起業を決意したのです。創業したのが1981年4月1日。創業後は一貫して消防用設備の設計・施工・保守管理を生業としてきました。生活の三要素「衣・食・住」の『「住空間」における「安全・安心」を提供する』、を企業コンセプトとしました。一方、「防犯・セキュリティ産業は、急伸し10年後には19兆円規模（正確な数字は記憶に定かでない）に成長する」、とのセキュリティ産業業界紙の記事に触発され、「安全・安心提供企業」には、防犯・セキュリティは必須と考えました。防災（消防）と防犯は、表裏一体で対策されるべきだと考えました。

1987年には、セキュリティハウスグループに加わり防犯に関わりを持つことになりました。法律で定められた消防用設備の構築に比べ、防犯・セキュリティビジネスは、システム構築や提案書の作成にも自由度が高く、のめり込むことになってしまいました。即ち、新聞や業界紙の記事が、私を「安全・安心クリエイター」へと導いてくれたことになります。

日本防犯設備協会（日防設）との関わり

1994年に防犯設備士資格取得、2001年に総合防犯設備士資格取得（総合防犯設備士資格制度発足第1期生）。2002年には刑法犯認知件数が285万件でピークを記録しています。この当時の世相の一つに、表現は悪いですが「防犯ブーム」が巻き起こっていました。年間2,000名を超える防犯設備士受験者が殺到していたのです。年4回、毎回地方会場2か所を含む4会場で開催されていました。受験セミナー・試験会場は、定員オーバーで次回繰り越し状態でした。そんな状況下、受験セミナー講師が不足していたのでしょう。講師をやらないか、とのお誘いがありました。田舎者で大海を知らない自分に自信はありませんでしたが、「勉強になるよ」という先輩講師の言葉に乗せられて、出口が見えない「防犯」の世界に入り込んでしまいました。その後、総合防犯設備士養成講座の講師や試験問題作成等々の職務の末席を汚すことになりました。総合防犯関係では、「総合防犯監査と総合防犯コンサルティング」を担当しました。難しい科目、内容でしたが掘り下げれば実に面白く、自らの商域にも寄与する内容が多々ありました。その先輩講師が助言してくれたように虜になっていました。大御所の先生方々から厳しいご指導（イジメかと思ったことが多々あったくらい厳しかった）を頂きながら、勉強嫌いの私とその人生で、最も勉強した時期だったと記憶しています。若い世代の方々に言い続けたい、同時に自分にも言い続けたい、「なんにでも興味を持って関わってほしい。きっと糧になる」と。

街頭防犯カメラとの関わり

2000年代初頭、ひったくりや路上強盗などの街頭犯罪の多発が社会問題となったことから、警察庁は「安全・安心まちづくり」施策を推進しました。2006年（2007年1月運用開始）、我が街にも街頭緊急通報システム（スーパー防犯灯）設置事業により10機が設置されました。わが社も設置工事の一部を担うことができました。折衝窓口の県警察本部の方々とも総合防犯設備士の勉強で培った「街頭防犯とカメラの有効性」等と同じ土俵でお話しすることができました。総合防犯設備士としての物の考え方、知見、捉え方が大いに寄与したことは、私の想定を大きく超えるものでした。

路上で発生するひったくり等の事案だけでなく、他の場所で発生するあらゆる事件に関与する人間も必ず道路を通って移動する。犯罪企図者も犯罪者も町中を移動する。街頭（一般公道）に設置する防犯カメラは、プライバシー保護など重要な課題はあるものの、事件解決や治安維持などに対して、非常に有効な手段であることは、今日では社会的に認知を得たと言えます。

当時のスーパー防犯灯は、少々欲張りな高性能スペックを搭載した高価なものでした。より沢山（多数）のカメラを街頭に設置すれば、「カメラで録画中」を告知すれば、犯罪発生を抑止に繋がるはずである。こんなカメラを世の中に出せないものか、好奇心が沸々と湧き出していました。

録画一体型防犯カメラの誕生秘話と啓蒙

下記のコンセプトを盛り込んだ新しい考え方の街頭防犯カメラを構想し、開発を開始しました。当初は、一笑に付されました。がしかし、今日では、街頭防犯カメラとして立派に市民権を得ました。



- ① “1つの目”（1台のカメラ）の予算で、“10個の目”（10台のカメラ）を設置できる

➡コスト軽減、同じ予算でより多くのカメラを設置。点から線での監視を確保する。

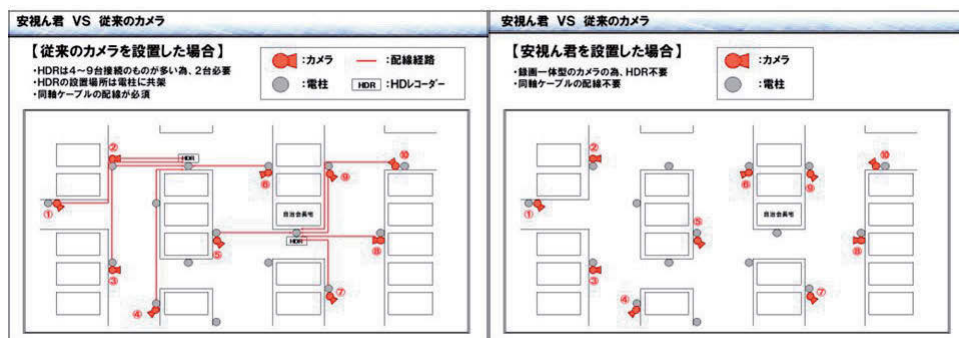


- ②常時監視はせず、必要な時だけ映像を取り出す

➡初期工事費の削減、ランニングコストの軽減、モニターレス、プライバシー保護を可能とする。

- ③通信用ケーブルを不要とした

➡商用電源AC100Vを供給するだけで運用開始。太陽電池からの電源供給タイプで汎用性を拡張。



（左）従来の防犯カメラシステムの配置例

（右）安視ん君の配置例

- ④「安全な街には人が集う」

➡カメラ設置でセキュリティタウン、向こう三軒両隣が協力し合い、安全安心を担保する。

- ⑤カメラを中心に安全な街を住民皆で創る

➡住民皆の参画でカメラを守る、カメラが住民を守る、主役はあくまで住民個々です。

- ⑥工事や維持管理は、防犯設備士/総合防犯設備士の寡占・独占業務とした

➡施工品質を高水準化する。防犯設備士/総合防犯設備士の独占業務を創出したかった（長年の日防設での委員会活動がそうさせた）。日防設の事業発展に貢献していると思う。

- ⑦全機種をRBSS認定品として登録

➡知名度が低い生産者には、品質のよりどころが必要と考えた。

- ⑧日本全国の電柱の数（3,500万本と言われている）すべてに録画一体型カメラを設置

➡監視、記録の密度が限りなく高くなり安全安心な街が担保できる。

※⑥、⑦の条件を敢えて設けることにより防犯設備業界の水準を高めることに寄与しました。

これらの考え方を市場に浸透させるには時間がかかるでしょう。好きで始めた関わり合い、ガムシャラに進むしかないかと納得しています。

防犯市場に留まらず、自然災害対策、交通安全対策、自動搬送、害獣対策、働き方改革、職場の安全対策、労働時間短縮対策、、、人間の豊かな生活の為にカメラが活用されるエリアは無限大です。

生まれながらの好奇心を満足させるまで走り続ける必要があるように納得しています。